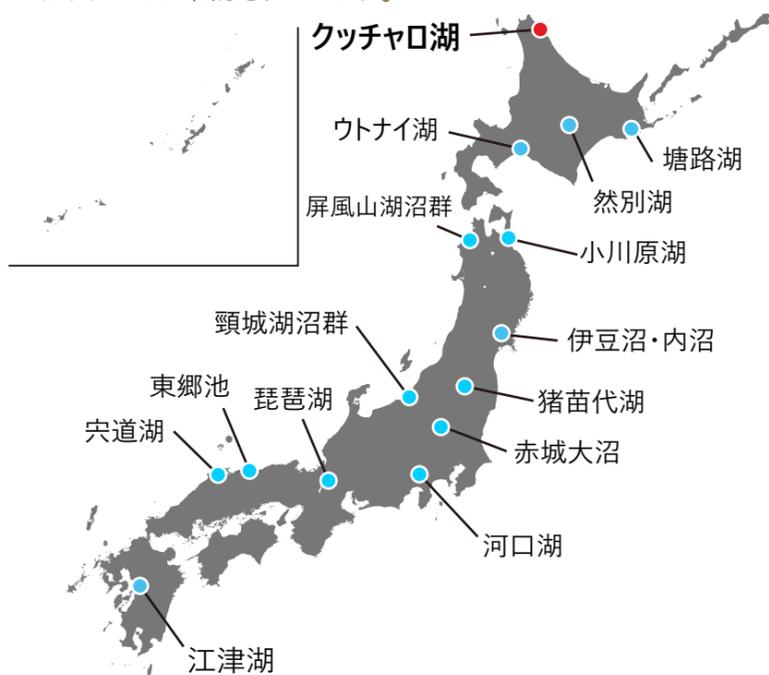


速報：モニタリングサイト1000陸水域調査（湖沼）水生植物調査

# クッチャロ湖サイト

— 北海道枝幸郡 —

クッチャロ湖は、北海道北部の浜頓別町に位置する周囲約30km、面積約14km<sup>2</sup>、最大水深2.5mの汽水湖です。付近一帯は北オホーツク道立自然公園の特別地域や鳥獣保護区に指定されており、春と秋にはコハクチョウやたくさんの渡り鳥が訪れ、渡り鳥の中継地としても有名です。クッチャロ湖は狭い水路でつながった大沼と小沼からなり、下流側の大沼には海水が流れ込むため、小沼よりも塩分が高くなっています。コアマモなどの汽水域に生育する水草が多く見られ、大沼では、環境省レッドリスト2020で絶滅危惧IA類に指定されているヤハズカワツルモが確認されています。



大沼



踏査の様子

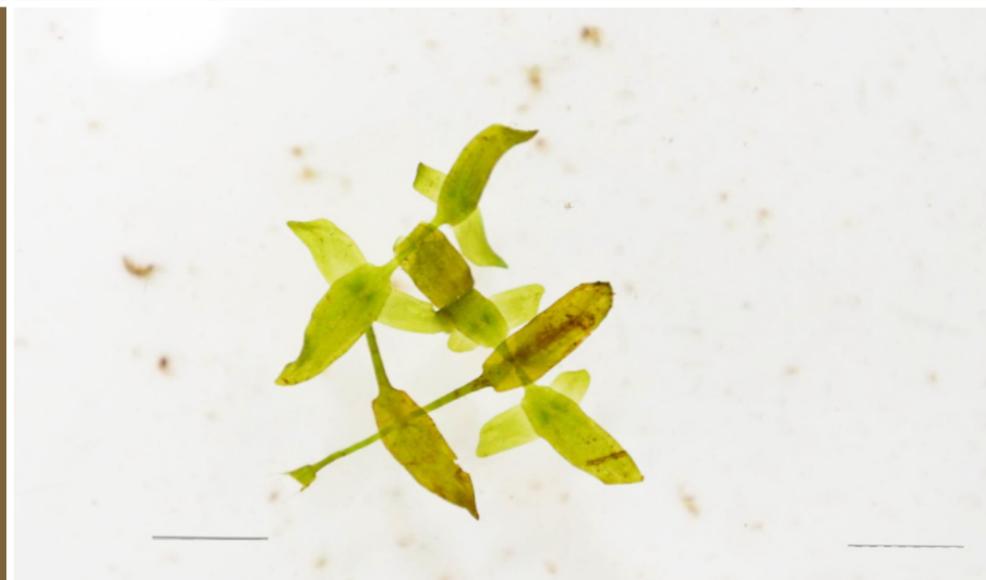
## 2024年度の調査結果概要

クッチャロ湖では、2019年度の第1回目調査に続き、第2回目となる調査を実施しました（2024年8月14日～15日に実施）。調査は湖全域（大沼と小沼）を対象とし、第1回目の調査結果を踏まえ、ボートによる定量調査と踏査を実施しました。

定量調査は25地点（大沼9地点、小沼16地点）で実施しました。その結果、リュウノヒゲモが最も多くの地点で確認され、次いでコアマモが多く確認されました。これら2種の他には、ヒロハノエビモ、マツモ、ヤハズカワツルモ等が複数の地点で見られました。また踏査では、33種（未同定種を含む）が記録され、希少な植物としては、ヤハズカワツルモ（絶滅危惧IA類）の他、シャジクモ、ヒンジモ、ツツイトモ（いずれも絶滅危惧II類）等が確認されました。

### 【調査者・調査協力者】

片桐浩司（帝京科学大学）、櫻井善文（株式会社ドーコン）、首藤光太郎（北海道大学総合博物館）、山ノ内崇志（福島大学）、奥山修右（北海道大学）、平井健心（東京農業大学）、青木美鈴（日本国際湿地保全連合）、小西敢・千田幹太（浜頓別町）



ヒンジモ（絶滅危惧II類）



リュウノヒゲモ



コアマモ



ヤハズカワツルモ（絶滅危惧IA類）

速報：モニタリングサイト1000陸水域調査（湖沼）水生植物調査

# 塘路湖サイト

—北海道川上郡—

塘路湖は、北海道道東の釧路湿原の東側に位置する淡水湖です。釧路湿原国立公園に含まれ、周囲18km、面積62km<sup>2</sup>、最大深度7mの海跡湖です。付近一帯は国立公園の特別地域・鳥獣保護区でもあり、オジロシヤアオサギ等の鳥類をはじめ、湖にはワカサギも生息し、冬には氷上でのワカサギ釣りが楽しめます。1970年代から2000年代にかけて複数の水生植物に関する調査報告があり、かつては多様な沈水植物が豊富に生育する環境でした。近年は湖の富栄養化により水生植物への影響が懸念されています。



調査地景観



エゾニズタデの花序と群落

## 2024年度の調査結果概要

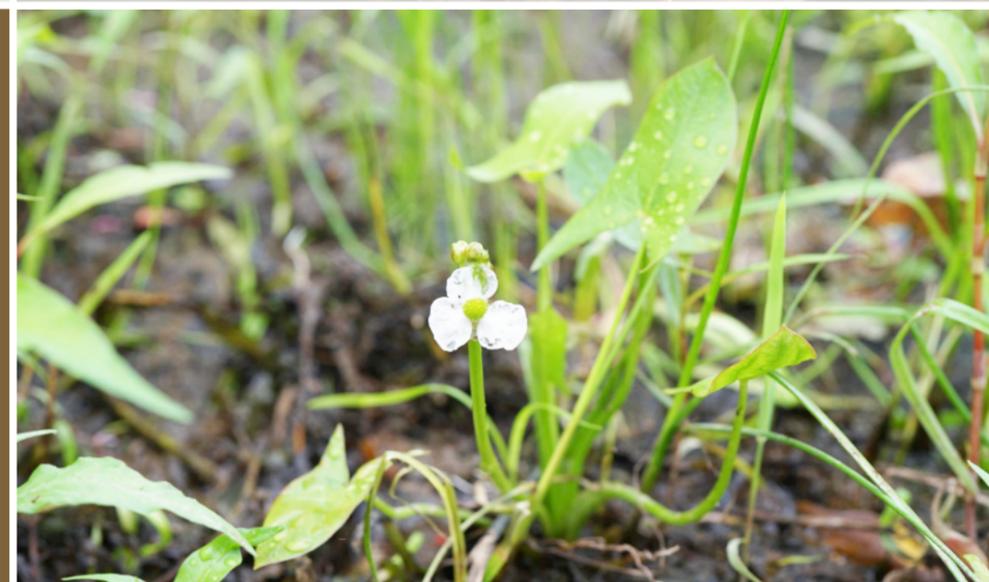
塘路湖では、2019年度の第1回目調査に続き、第2回目となる調査を実施しました（2024年8月7日～8日に実施）。今回の調査では、調査地点の一部見直しを行い、ボートによる定量調査と踏査を実施しました。

湖内の11地点で定量調査を実施した結果、ヒシが最も多くの6地点で記録された他、エゾニズタデ、エビモ、ホザキノフサモ等が複数の地点で確認されました。また踏査では、68種（未同定種を含む）が記録され、種の保存法の対象となるカラフトグワイの他、エゾベコヒツジグサ等の希少な種も確認されました。特にカラフトグワイは、その保全策としてシカ除け柵が設置された効果もあり、前回と比べて分布範囲が拡大し、前回は見られなかった花や浮葉も観察することができました。

調査地点の見直しは、無理なく継続的な調査を実施していく上で必要となる日常的な観察による情報を得るため、地元で調査を実施している地点を追加するを行いました。また調査にあたって、地元の標茶町博物館や民間会社の協力を得て実施することができました。

### 【調査者・調査協力者】

持田誠（浦幌町立博物館）、山崎真実（札幌市博物館活動センター）、首藤光太郎（北海道大学総合博物館）、加藤ゆき恵（釧路市立博物館）、元永康誠（標茶町博物館）、田村由紀・濱裕人・新田矩譜流（環境コンサルタント株式会社）、石下亜衣紗（環境省釧路湿原自然保護官事務所）、青木美鈴（日本国際湿地連合）



カラフトグワイの花



調査器具を使ってヒシ等の水草を採集する定量調査の様子



ヒロハノエビモ



カラフトグワイの浮葉

速報：モニタリングサイト1000陸水域調査（湖沼）水生植物調査

# 猪苗代湖サイト

— 福島県会津若松市・郡山市・猪苗代町 —

猪苗代湖は、福島県のほぼ中央部に位置する淡水湖です。磐梯朝日国立公園に含まれ、周囲51km、面積104km<sup>2</sup>、最大深度95mの国内で4番目に大きい湖です。湖の北部には、国の天然記念物に指定されているミズスギゴケ群落やハクチョウ渡来地があります。猪苗代湖はかつて酸性の水質を示す湖沼でしたが、1995年頃から急速に中性化が進み、2005年以降はpH7程度で推移しています。中性化による環境の変化やそれに伴う生物多様性への影響が注目されています。



ホソバミズヒキモ



カンガレイ

## 2024年度の調査結果概要

猪苗代湖では、2019年度の第1回目調査に続き、2024年9月20日～21日に第2回目となる調査を実施しました。調査は、前回の調査結果を踏まえて、湖北にてボートによる定量調査、北岸と南岸にて踏査を実施しました。

定量調査は9地点で実施しました。その結果、クロモとセキシウモが4地点、次いでヒシとオニビシが2地点で確認されました。その他には、希少な種であるヒメフラスコモ（絶滅危惧I類）やシャジクモ（絶滅危惧II類）も確認されました。

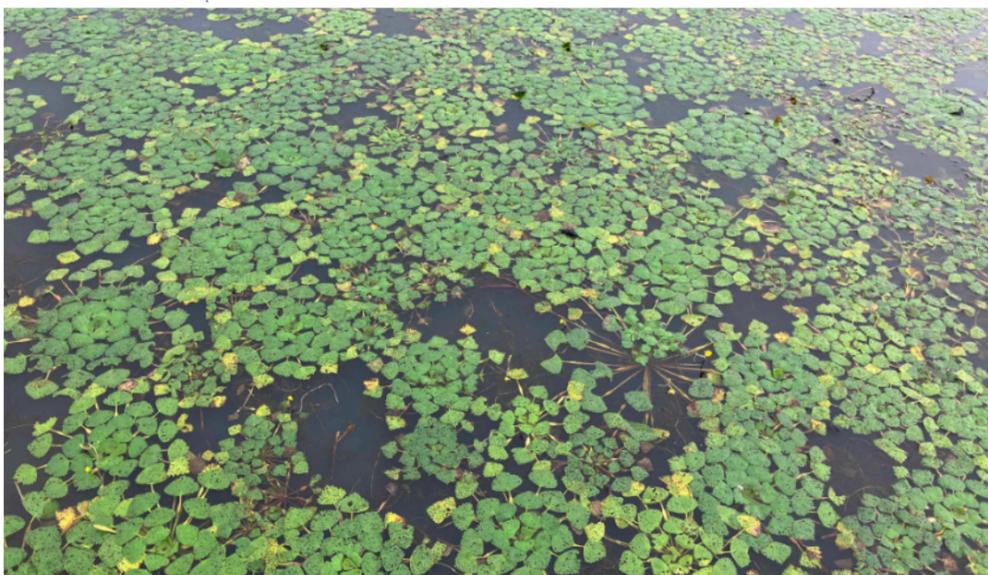
踏査では、ホソバミズヒキモやセキシウモ等の80種（未同定種を含む）が記録されました。また、マルバオモダカ、トリゲモ、イトイバラモ（いずれも絶滅危惧II類）の他、ヒメミズニラ、ミズニラ、イチョウウキゴケ、ミクリ、タチモ、イヌタヌキモ、アサザ等の希少な植物も見られました。さらに1990年代以降確認されていなかったジュンサイがおよそ40年ぶりに確認されました。数多くの希少な植物が見られた一方で、コカナダモやキショウブ等の侵略的外来種も見られました。

### 【調査者・調査協力者】

黒沢高秀・山ノ内崇志・出島聖也（福島大学）、加藤将・三浦克仁（新潟大学）  
青木美鈴・朴恵眞（日本国際湿地保全連合）



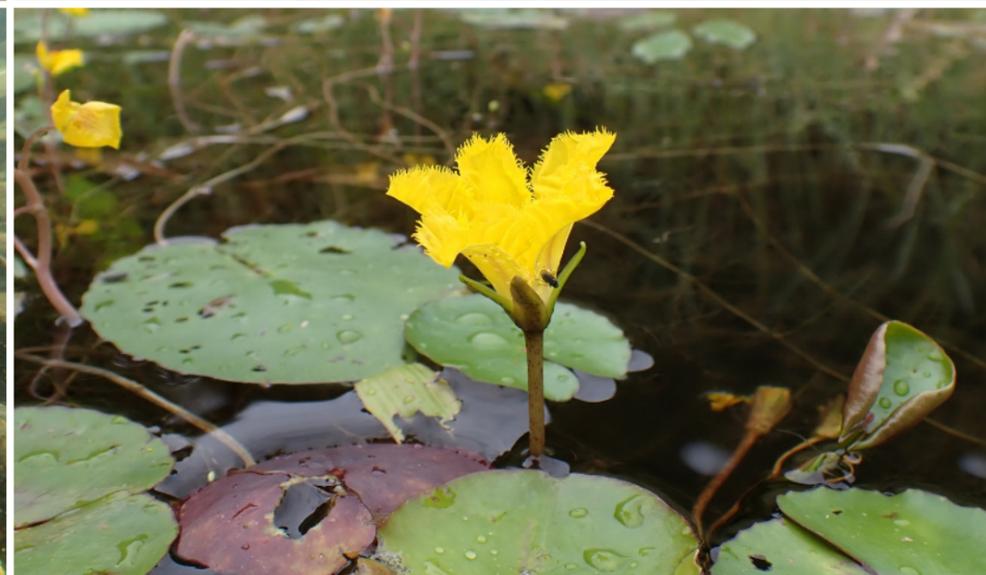
イヌタヌキモの花  
広範囲にわたってたくさんの花をつけていました



水面を覆うヒシとオニビシ



セキシウモ  
雌花の茎が水面に向かってらせん状に伸びています



アサザ